

---

# さかさまな世界

風霧　迅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さかさまな世界

### 【Zコード】

Z2959BA

### 【作者名】

風霧迅

### 【あらすじ】

「日本に行つて勉強してこい」主人公久遠は、十に言われ、日本並盛中に通うことになる。舞台はリボーンですが、主人公は転生者ではありません。元々リボーンの世界にいた人物です。

## 自己紹介

誕生日	性別	歳	名前	性別	名前	若色 久遠
	一人称		フリガナ	一人称	フリガナ	ワカイロ クオン
12月24日	男	27	モギキ レイト	ウチ	ウチ	
オレ			十 荔枝			

幼い頃捨てられてしまうものの、十に拾われる。  
戦闘、暗殺術を十達に習う。  
十に学校に通うよう言われ日本に来た。  
十が、マフィアをしていることは知っている。

備考

身長

165

所持品

携帯 財布

血液型

?

髪型

サイドテール

目の色

黒  
黄緑

髪の色

黒

トリップ者	裕福な家庭だが、家庭内暴力があつたりしたので家出をした。	備考	153	身長	身長	所持品	携帯 財布	血液型	A	髪型	ロング	目の色	赤
名前	神崎 里桜	名前	神崎 里桜	性別	女	性別	女	髪型	ロング	髪の色	黒	目の色	黒
フリガナ	カンザキ リオ	フリガナ	カンザキ リオ	一人称	私	一人称	私	髪の色	ロング	髪の色	黒	目の色	黒
誕生日	9月9日	誕生日	9月9日	目 の 色	茶色	目 の 色	茶色	血液型	O	血液型	O	目 の 色	茶色
髪 型	ショート	髪 型	ショート	所持品	携帯 財布	所持品	携帯 財布	身長	153	身長	153	髪 型	ロング

久遠を育てた張本人。  
アンネナーレファミリーのボス。  
他に10人の部下がいる。  
「カルマ凶劇」という二つ名がある。

お願いとして最強設定をつけられている。

## 始まり

「日本に？」

「やべ、まあ日本の文化とか違った場所で学ぶのもいいだろ？」

「あなたの提案には正直驚く。

まあ、良いかもしない。

日本は一度行ってみたかったところだ。

「引っ越しの手続きとかは、もうしてあるから安心しない

「…速いですね。やる」とが

「場所は並盛だ」

…あれ？ ウチの記憶が正しければ。

「確かに、ボンゴレ十代田候補もそこに住んでいたような…？」

「そうだ。別にアレを守れとこう指令ではない

アレ扱いですか…でもまあよかつた…。

「明日こま、行くからな」

「分かりました。早速荷物のまとめをしてきます

十数人のいた部屋を後にして自分の部屋に戻る。

並盛か… いつたいどんな街だろう。

そもそもウチは恥ずかしいことなのだが、一人で口クに外に出たことは無いのである。

いつも、ファミリーの皆と一緒に近くの市場に出かけるくらいだったし、

日本といつ遠く離れた地に行くのは不安である。

しかも片手で数えられるほど回数しかない。

強くなるためにひたすら修行していたことが原因である。

「ファミリーに入るのだから、強くないとダメだ」といつ十さんの言葉で、やることになったのである。

5歳の時に拾われてから、暗殺、戦闘術を一通り学んで自分なりの戦いを身につけたり、

今思い返すと、アレは拷問に近いと思う。

そもそも、規格外の強さを持った人たちが多いと思つこのファミリー。

体から“死ぬ気の炎”なんていう不可思議なものを使って戦つた  
り、

その炎に“甲兵器”といつものに注入すると、動物とかが出てきたり…。

普通の人たちはそんなことはできないと願いたい。

「平和なところでありますよつこ」

「ン」

「うんね、遅くに」

「どうしたの、レイアーヴ？」

ドアを開けたのは、銀色の髪に花の髪飾りをつけた女性。

彼女もアンネナーレファミリーの一人である。

「日本に行くのって本当?」

「うん」

「じゃあ、これ…」

渡されたのは、十字架のネックレス。

赤い宝石が埋め込まれてこる。

「え……いいのこれ?」「

「がんばってほしいから受け取つて、お守り」

「ありがと」

「ハーハーハー」としてくられるのは彼女ぐらいたである。

他の皆は、優しさの微塵もない鬼である。

戦闘にしか興味のない人たちだからなー。

「じゃあ

「がんばるね」

さてと……荷物のまとめをしないと。

まず服は……並盛で買えぱいこよね。

一応5着だけにしとこいつ。

それと本に「アルバム」……装飾品ぐらいかな。

「できた……」

これでよし。

キャリーバックーつこまとめられた。

これで眠れる。

「イニジが…並盛」

日本空港を出て、タクシーで並盛町に乗りついでここまで来たが

うん、平和。

言葉に表すと平凡というのだろうか。

でもそれがいい。

皆はとても楽しそうな顔をしているから。

「まあ、ファミリーの皆みたいに、非常識な人たちはいなそう」

「ういえふと疑問に思つたのだが、中学生で一人暮らしは有な  
のだろうか？」

普通は高校生がするものってテレビで見たんだけど

まあ大丈夫か。

さて、まだ時間もあるし観光とか、何かいいものがないか探し  
ますか。

雑貨屋もある」とだし。

キャリーバックを引きずりながら「」みの中を歩いていった。

\*

「… でかくない?」

十数人に渡された地図を頼りに歩くと見つかり、

今度から自分の家になるマンションを見ての第一声はこれ。

(不本意だが) 一人暮らしには大きすぎる3LDKのマンション。

一体どうしてこんな大きなマンションを選んだのか疑問に思つ。

無駄にお金があるからなのだろうか?

紙に書かれた部屋番号を確認しながら中に入つて行く。

因みに七階建ての最上階だ。

そしてドアを開けようとしたのだが、可笑しいと感じた。

人の氣配がするのだ。

しかも、ウチのよく知っている氣配。

……なんだらう、嫌な予感。

とりあえず、中の様子を見ないことには変わりはない。

ドアを開け、リビングに行く。

その人物は、ソファに腰かけて読書をしていたらしい。

そして、ウチに気がつくと何気ない風に声をかけた。

「やあ、久しぶり」

「…………」

思わず絶句した。

なぜイタリアにいるはずの人人が日本  
場所にいるのだろう。

これは幻覚、きっと悪い夢を見ているんだ。

そう思つていたら、いきなりナイフが飛んできたのだと、さすに避け  
る。

ズダダダダ

勢いよく突き刺さったナイフをみて思わず額から冷や汗が流れる。

せつそく壊す気満々！？

「恐っ！？ いきなりナイフ投げないで！」

「君が無視するからじゃないのかなあ？」

「だからといえナイフは無い！」

もし避けなかつたら、あのナイフの餌食になつていたところだら  
う。

いつも思つとぞつとある。

というかあの氣色悪い笑顔…確実に当てる気満々だつた。

キモイ、変態率が確実に上がつてるよ。

せつかくの美形が台無じじゃん。

「…で、どうしてここにいるのかな

フロード？」

現実逃避も失敗に終わったので、質問に入るとしよう。

彼の名は。フロード・ダストール。

彼もファミリーの一員なのだが、十さんと並ぶ最強の人。

強い奴と戦うことを生きがいにしている変人でもある。

ウチもその部類に入っているらしい。

「一つも「ザットオブジェクト昏睡嗜虐」<sup>（ハグセイシキョク）</sup> という恐ろしく中一病じみた名前をもつて  
いる。

「ああ、十に言われてね。『保護者の代わりとして一緒に住め』って

「ウチの一人暮らしオワタアー！」

両手で顔を覆う。

悲しい…考えてみるとウチの人生も、もうオワタな感じがする。

そもそも、保護者選択間違ってる！

レイアーリーとかちょっと危険だけビウントベリーリーの人物とかマシン人いたよね！

何があつた！？ 質、任務とかで忙しかつたの！？

見捨てないでほしかつた！

最終的にフロドを選んだとかなに考えてるの、あの人！

「これからよろしくね

「よろしく…」

したくないけど。

「部屋は、玄関から右側奥だから」

「ハハハ！ じゃあね！」

脱兎のごとく駆けだして自分の部屋に入る。

ヤバい…ウチの精神がすごいダメージを。

あの変態め…おそろいなホント。

気を取り直して…… とりあえず荷物整理でもしますか。

## 学校

朝、時差ボケをせずに起きた。

寝坊なんてしたら遅刻しちゃうからね。

さて…学校に行く準備しなくちゃ

ふとあることに気が付いた。

「制服…受け取りに行くの忘れてた……！」

ウチの馬鹿！

うわあ…マジでビハビハ。

似た感じの服で行こうか。

リビングで一人唸つていると、ガチャリとドアを開ける音。

フロドが入ってきたようだ。

視線を上げ彼を見てみると…なぜか小包を片手に。

「久遠、昨日渡し忘れていた制服と生徒手帳とスクールバッグ

「いつのドテツ腹に一発殴りつかとと思つた。

ウチの時間を返せ。

「……心配して損した」

問題も解決したから着替えよう。

部屋に戻り、着替え始める。

……ス、スカート短っ。

長いほうがウチ的によかつたのこ。

バックに、筆記用具とノート生徒手帳を入れて…よし。

玄関へと向かう。

おつと、忘れてた。

フロドは殺戮主義者だけど一応は家族だもん。

挨拶ぐらいはしないとね。

「行つてきまーす」

「行ってらっしゃい」

\*

「下見してよかつた」

呑気に歩きながらそつ懶く。

観光と共に今日から通つ並盛中を昨日見てきたのだ。

物の十分で道に迷つことなく、無事に学校にたどり着いた。

まずは職員室だよね。

にしても、名前に『並』が入つてゐただけあって、普通な学校だ……。

「あつた。失礼しまーす」

ガラツと扉を開けて職員室に入る。

「今日から転校してきた若色久遠です」

軽い自己紹介すると、一人の教師がうちの方に近づいてくる。

「早かつたな。お前のクラスの担任だ」

「どうも」

「君のクラスは1 Aだ。

もうすぐHRの時間だからつけてきなさい」

「はい」

「じゃあ、呼んだら入つていいよ」

「分かりました」

数秒すると男子が騒ぎ出した。

何があつた男子。

「入つてこい」

ガラツと扉を開けて教卓の前まで行く。

「じゃ、血口紹介をしや」

「若色久遠とここます。家の事情でイタリアから並盛に来ました。よろしくお願ひいたします」

ん？ 殺氣が…。

わつわのむとを見てみると、ここには懸童獄寺が。

何で殺氣を向けられて、いるんだりつへ。

それに… なんでボンゴレ十代田候補もいる？

なんか平和な日常をぶち壊される予感が。

「じゃあ、若色の席はあそじだ。窓側の席」

危ない。

別世界にトリップするといひだつた。

窓際か…まあまあいい席。

「じゃあ、H.R.ルームを終わるだ

すると同時にポケットに入っていた携帯が震えた。

新着メール一件？ 相手は 十さん？

何々…

『ボンゴレ十代目がどんな人物なのか。

どんな小さなことでもいいから情報をメールで送ってくれ  
十さんの指令が。

断る理由がないから』『OK』で送信した。

\*

時間はたちお昼の時間。

ウチは屋上に来ていた。

え？ 理由？

お昼の時間になつたときにボンゴレ十代目が教室から出ると悪童  
もそれを追つよう、元々

教室から出たんだよ。

気になつたもんでもウチもそのあとを追つてみると、あの一人がバトルをするといつ話が聞こえてきて、

それを見たいから、見晴らしのいい場所 つまりは屋上からよく見えるという判断で、

ここにいるといつわけ。

「でも、部外者がいるんだよねー」

短髪の女子。

そういえばあの女子もウチに向けて殺氣を放つていたね。

何でかは知らないけど。

「…リボーンもいるし」

一頭身ぐらいで黒帽子をかぶつた赤ん坊 リボーン。

情報によれば十代目の家庭教師をしているんだっけ？

『死ぬ氣で消火活動！…！』

死ぬ気弾を十代目に撃つたねリボーン。

額からオレンジ色の死ぬ気の炎が燃え上がっている。

属性は大空か。

ボスとして当然の属性だね。

『一倍ボム!』

と悪童の投げたダイナマイトをボンゴレは素手で消していく。

さらしに、『二倍ボム』を放とうとするが、未完成らしい。

ダイナマイトが一つ手からこぼれおちた。

それに続くよつこ他のダイナマイトも落ちていく。

爆発…いやボンゴレが消した…?

『消火活動』を目的として死ぬ気になつたボンゴレは、

悪童の周りに落ちたダイナマイトの火も消していく。

ふむふむ…やるな。

『御見逸れしました！！！ あなたこそボスに相応しい！…！』

おお、忠誠かな？

今即ちにメールしよう。

『ボンゴレ十代目は、大空の炎を使う。

あと、悪童スモーキンボムと戦つてボンゴレの勝ち。

悪童は十代目に忠誠を誓つた模様』

送信つと。

さて、ウチはあの短髪の女子について調べないとね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2959ba/>

---

さかさまな世界

2012年1月10日10時52分発行